Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-18

漢音声調における上声・去声間の声調変化 : 日本漢文の場合

石山, 裕慈

(Citation)
國文論叢,48:1-12

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011663

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011663

漢音声調における上声・去声間の声調変化

――日本漢文の場合――

石山裕慈

一、問題の所在

唐代長安方言に由来する日本漢音とは、声調に関しても韻書（広韻）と対応するというのが素朴な見方であり、またその把握で大過はないと言える。しかし、このような図式が成り立つのは漢籍訓読資料のような規範性の高い資料の場合であり、日本漢文のように規範性が低い資料にあっては韻書との乖離が見られることが、近年の研究で明らかになってきた。日本漢字音とは、必ずしも均質的ではなく、当該資料の性質や書写者によって異なった様相を呈していたことになる。

呉音のみならず、漢音資料にあっても、日本語の音韻変化に従った声調変化が起こっていたことが、佐々木勇（二〇〇九）などで論じられた。すなわち、日本語での上昇調アクセントの消滅に伴う「一音節去声字の上声化」や、「中低型の回避」、つまり「上声―去声」「去声―去声」のような型を避けて、後項の去声字が上声化する変化などがそれである。

さらに、最近では「漢語」全体を対象とした研究も盛んに行われている。加藤大鶴（二〇〇九）は『尾張国郡司百姓等解文』、同（二〇一〇）は『宝物集』における漢語声調について論じたもので、それぞれ日本漢音・呉音声調の原則に合わない声点の存在が指摘されているほか、『本朝文粋』の漢語声調については石山裕慈（二〇一一）で論じたところである。日本漢音声調研究は新たな段階に入っていると言うことができる。

その一方で、従来指摘されている現象であっても、どのような場合に起こりやすいか、また呉音声調の傾向と平行しているか否か、といったような、個別の事情に立ち入った研究は、幾分手薄であるように思われる。単字の声調変化の実体が完全に解明されているとは言えないのであり、究明すべき事柄は数多く残されている。本稿では、現象自体はすでに指摘されており、研究の蓄積もある上声・去声間の声調変化について、いくつかの場合に分類しつつ論じる。

先述したとおり、規範性の高い資料ほど、韻書から外れる声点が出現しにくい。一音節去声字の上声化などが皆無ではないとはいえ、むしろ「漢籍訓読資料の漢音においては、呉音に見られた

①（中低型回避のこと…筆者注）②（一音節去声字の上声化のこと…同）の声調変化は、全体としては起こらなかったことが確認され」（佐々木（二〇〇九）・六一一ページ）るのである。

そこで、本稿では、韻書から逸脱する例が多く現れる日本漢文資料を調査の対象に据える。その中でも、特に『本朝文粋』を中心に論じることとする。多様な文体が収録されていることから様々な場合分けが可能であることと、石山（二〇一一）で述べたように、個々の資料でそれぞれ独立した変化が起こっており、従って当時発生していた「生」の声調変化が現れやすいと考えられることなどがその理由である。

二、『本朝文粋』巻六における各種の声調変化

『本朝文粋』は一四巻から成り、その中でも「奏状中」を収める巻六と、「祭文」「表白」などを収める巻一三が多く現存しているという特徴がある。本稿では、まず現存している本が多く、また呉音語が混入している割合が低いと考えられる巻六について、考察を行う。

管見に入ったものの中から、以下の各本を考察対象とする。いずれも石山（二〇一一）で検討した資料であるため、概略のみ記す。以下、丸数字は資料の番号を示す。

①久遠寺本…清原教隆の訓法を伝える資料で、佐々木（二〇〇九）で詳細な研究が行われている。ここでは巻六についてのみ調査し、後述する巻一三・一四についてもそれぞれ巻ごとに集計を行った。調査は『重要文化財本朝文粋（全二冊）』（汲古書院、一九八〇）によった。

②書陵部本…鎌倉時代初期書写と見られ、書写者の素性は判然としない。調査はマイクロフィルムによった。

③醍醐寺本…延慶元（一三〇八）年に、僧「禅兼」が書写したことが奥書から読み取れ、久遠寺本とも訓法が異なっていることが小林芳規（一九九二）で指摘されている。調査は小林芳規（一九九〇・九一）によった。

④大谷本…書写者の素性は判然としないが、仮名字体や返り点・踊り字の形状などから鎌倉時代末か、あるいは南北朝時代に食い込むものかと考えられる。調査はマイクロフィルムによった。

①～④の各本に現れる上声点・去声点が、韻書上声・去声とどのように対応するかをまとめると、後掲「別表」のようになる。[1]

ところで、漢音の平声字は呉音では上声・去声となり、漢音の上声・去声字は呉音では平声となるのが一般的であるとされる。[2] すなわち、上声・去声点が加えられている韻書上声・去声字とは、漢音声調である可能性が高いということになり、本稿の趣旨に照らし合わせてそのような例のみを調査すればよいことになる。とはいえ、この逆対応にも例外が多々存する上に、[3]『本朝文粋』の漢語声調がしばしば予測不可能な形で現れることから、音形などから呉音形であると考えられるものについても、本稿の分析対象から省いた。

別表によると、いずれの資料においても、韻書上声字には上声点が、韻書去声字には去声点が付されている割合が高くなっているが、それに当てはまらない例も少なからず見られ、しかもその多寡は資料によってまちまちである。すなわち①では、韻書去声

字のうち上声点が付されているのは全体の一割に満たないのに対し、それ以外の資料では、四分の一程度に上声点が付されていることになる。この場合に限らず、韻書から外れた例というのはどのような性質を有しているものなのか、分類しながら見ていく。

まず目につくのが、韻書上声全濁字に去声点が付されている場合であり、これは「上声全濁字の去声化」として夙に知られている。上声全濁字の去声化については沼本克明（一九八二）本論第二部第五章などで研究が行われており、この現象は唐代長安方言における音韻変化に由来するもので、日本漢音では学統や資料の性質によって去声化の度合いに差が見られるとされている。[4]

『本朝文粋』巻六について見ると、②書陵部本のみが上声・去声が半々であるのに対し、それ以外は去声化例の方が多くなっているのであって、本によって傾向が異なっている。同じ作品であっても、本によって上声全濁字の去声化の度合いが異なる場合があるということは、従来指摘されてきた事柄であった。すなわち、『蒙求』においては、本によって上声全濁字の去声化の割合がまちまちであることが観察され、その背景には反切などの学習が想定されている。[5] しかし、『本朝文粋』の場合は、このような学習は介在していないと考えられるのであり、詳細については未勘である。[6] 本稿の主題である声調変化とも別次元の問題であることから、本稿ではこのような問題点が存することを指摘するにとどめておき、子細な検討は他日の課題としたい。

さて、「上声全濁字の去声化」を除くと、「韻書上声字に去声点が付された場合」に比べ、「韻書去声字に上声点が付された場合」の方が多い傾向があることに気づく。この「去声→上声」の変化については、従来呉音声調の側の事柄として知られていた。すなわち、平安時代後期以降に発生した「一音節去声字の上声化」と「中低型回避」という二つの変化である。[7] この種の声調変化は、従来呉音にのみ見られるものと考えられてきたが、近年の研究で漢音資料にも見られることが明らかになってきたということは前節で述べたところである。『本朝文粋』においても、「一音節去声字の上声化」の例が、以下のように少なからず見られる。[8]

①…歩、魏の二字二例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、一四字一七例。

②…尉、化、稼、箇、画、棄、議、遇、故、佐、刺、四、至、試、事、字、治、舎、素、地、智、著、度、二、布、歩、暮、茂、吏、路、祚、翅、蠹の三三字五四例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、一五字二〇例。

③…位、異、化、価、夏、稼、箇、餓、駕、器、棄、義、去、故、顧、佐、座、刺、四、至、侍、次、治、舎、庶、素、地、智、布、歩、茂、夜、吏、路、祚、翅、蠹の三七字七二例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、二九字四八例。

④…暗、位、異、価、稼、箇、賀、餓、駕、器、棄、貴、義、去、故、顧、佐、刺、四、至、侍、次、治、舎、庶、助、数、素、智、著、弐、布、歩、暮、茂、夜、吏、路、祚、翅、蠹の四二字七八例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は三〇字四三例。

このように、久遠寺本以外の各本で一音節去声字の上声化が進んでいることが知られる。

次に、中低型回避の有無を調べるために、二音節の韻書去声字に上声点が付されている場合を、前後の漢字に付された声点とともに出現順に挙例する（清濁の表記は省略）。

①…公(平軽)俸(上)、廉(平)譲(上)、沈(平)困(上)の三例。

②…及(入)第(上)、＊前(去)例(上)、及(平)第(上)、事(平)状(上)、暗(上)室、＊挙(上)状(上)、茜(上)衫(平)、三(去)代(上)、散(上)（単独）、万乗(上)、廉(平)譲(上)、＊二(上)代(上)、前(去)例(上)、少(上)子(上)、好(上)文(平)の一五例。

③…好(上)文(平)、上(平)第(上)、及(入)第(上)、五代(上)、及(入)第(上)、及(入)第(上)、暗(上)室(入軽)、時(上)代(上)、暴(上)風(平軽)、事(平)状(上)、及(入)第(上)、公(去)帳(上)、＊万(去)乗(上)、三(去)代(上)、廉(平)譲(上)、＊叡(去)聴(上)去、二(平)代(上)、好(上)文(平)、先(去)例(上)の一九例。

④…行(上)（単独）、先(去)例(上)、上(平)第(上)、従(上)四(平)位(平)、及(入)第(上)、試(平)経(上)、＊五(上)代(上)、及(入)第(上)、＊五(上)代(上)、及(入)第(上)、事状(上)、散(平上)位(去)？、時(上)代(上)、事(平)状(上)、従(上)下(平)、及(入)第(上)、公(上)帳(上)、＊万(去)乗(上)、好(上)文(平)、湯(去)療(上)、廉(平)譲(上)、二(平)代(上)の二二例。

一音節去声字の上声化がそうであったのと同様、やはり本によってばらつきが見られるのであって、特に④には中低型回避とおぼしき例が多いという特徴がある。ところが、ここで挙例したものの中には、漢音語の中低型回避例と断言できるものが必ずしも多くない。それというのも、「中低型回避」が発生している漢語のうち、前項の漢字が韻書上声・去声字であることが確実な語というのは＊を付したものに限られるのであって、それ以外の「中低型回避例」については呉音語の可能性が存するのである。また「二代」「及第」のような特定の語が頻出するのは、その形で漢語声調として固定していたことを示しているとも考えられるところである。

ところで、ここで挙例した用例を眺めると、二音節の韻書去声字に上声点が付されている場合というのは、必ずしも「中低型回避」例ばかりではないことに気づく。すなわち、語頭や平声・入声字の直後のような、去声字が上声化する必然性がないところで上声加点例が出現する場合が多数見られる。

ここで想起されるのは、呉音声調における上声・去声の分布のあり方である。呉音語の二音節上声字というのは「語中」に出現する傾向にあることが従来指摘されているのであって、[9] この場合の二音節上声字は、いわば「結合標示機能」を帯びていると見なすことができる。『本朝文粋』の二音節韻書去声字に対する上声加点例も、これと平行していると考えられるところである。ただし、「結合標示機能」を前面に出すには、語頭における二音節韻書去声字の上声加点例の存在が目立つのであり、呉音の場合と事情はやや異なっているようである。[10]

ところで、ここまでで見てきた「韻書去声字の上声加点例」の逆の例、厳密には「韻書上声非全濁字の去声加点例」には、何らかの傾向は見られるだろうか。これらは語学的見地からは去声点が付された理由が見いだしがたい一群である。該当例を掲げる。[11]

①…苦、#乳。

②…#元、土、#乳、#宝、#飽、#本、煖。

③…#雨、款、#挙、#古、#紫、#耳、#手、#乳、#撫、
　飽、#飽、本、#老、#窘、煦。
④…#雨、#挙、#耳、#手、#所、#数、#乳、飽、#飽、
　魯、#窘、煦。

呉音声調においては、二音節上声字が語中に現れやすいのとともに、一音節去声字が語（句）頭に現れやすい（語（句）中の一音節去声字から先に上声化した）ということも従来指摘されているところである。[12] すなわち、呉音上声・去声の分布には、音節数とともに語頭か語中かという要素も関わっていることになる。『本朝文粋』での「韻書上声非全濁字の去声加点例」についても、やはり本によるばらつきはあるものの語頭の例が多く見られるのであり、呉音声調と軌を一にしている。

もう一つ興味深いのは、先述した「一音節去声字の上声化」とは裏腹に、「一音節上声非全濁字の去声化」も見られることである。これについては、呉音のみならず漢音でも「一音節去声字の上声化」が進んでいた、その趨勢に逆らった「直しすぎ（hyper-correction）」と考えられる。もっとも、『論語』のような規範性の高い資料では、「一音節去声字の上声化」も、またそれから類推した「一音節上声非全濁字の去声化」もきわめて少ないのであり、ことさら一音節去声字を意識すること自体が規範性の低い資料特有の現象と言える。そして、一音節去声字の上声化やその直しすぎ、中低型回避、語頭去声の分布などの多寡は本によってまちまちなのであって、特定の本が規範的／非規範的というわけではない。その内実は、個々の要素が個別に日本語化を起こし、相互の関連性が見いだせないという、石山裕慈（二〇〇九）で述べた状況と、本質的には変わらないと考えられる。

このように、『本朝文粋』の漢音声調とは、呉音声調とある面では軌を一にしながら、別の面では独自の声調変化を遂げているという特徴があった。それでは、このような特徴とは、当該資料への呉音語の混入の度合いに影響されているのだろうか。より具体的には、『本朝文粋』の中でも、より仏教的な色彩を帯びた巻では、巻六に比べて一音節去声字の上声化や中低型回避が進んでいるような傾向は見られるのだろうか。この疑問を解決するために、続いて『本朝文粋』の中でも仏教的な色彩を帯びている巻一三・一四について、同様の検討を加えてみる。

三、『本朝文粋』巻一三・一四の場合

本節で考察の対象とするのは、以下の各本である。

⑤久遠寺本・巻一三…前述。なお久遠寺本にあって、巻一三のみ界高が高く、他の巻と体裁が異なっている。
⑥天理本…巻一三のうち、前半部分と末尾の四段分が欠けている。小林芳規氏による『天理図書館善本叢書・平安詩文残篇』（八木書店、一九八四）の「訓点解説」で、鎌倉時代中期の書写と考えられること、久遠寺本とは訓の系統が異なっており藤原家の訓読を伝えた可能性があることなどが指摘されている。なお猿投神社蔵本が本資料の僚巻である由だが、筆者は実見の機会を得ていない。調査は前掲書によった。
⑦大谷本…巻一三。欠損箇所が多く、全体の半分弱しか現存しない。仮名字体や返り点・踊り字の形状などから、室

町時代以前に書写されたものと思われる。なおこの資料については、一つの漢字に複数の声点が記入された例がとりわけ多く、それだけ揺れが大きかったと考えられる。調査はマイクロフィルムによった。

⑧久遠寺本・巻一四…前述。最初の二三行と後半の一二一行については後補されたものであるため、調査対象から除いた。

⑨真福寺本…巻一四。弘安三（一二八〇）年の書写奥書があり、藤原南家の訓を伝えている。調査は『真福寺善本叢刊・漢文学資料集』（臨川書店、二〇〇〇）によった。

これらの資料に現れる上声点・去声点が、韻書上声・去声とどのように対応するかをまとめ、「別表」に掲載する。集計の要領は巻六と同様であるが、文体の性質上、呉音字として除外される例が巻六よりも多くなっている。

まず、全濁上声字の去声化の度合いが資料によりまちまちであり、この点に関しては巻六と同様である。また、韻書上声非全濁字への去声加点例、韻書去声字への上声加点例の度合いについても、やはり資料によりまちまちであり、特に⑦に韻書から逸脱しているものが多く見られる。とはいえ、韻書から逸脱したものの割合という点では巻六と特段変わらないのであり、仏教的な文脈であるか否かが、日本漢音声調に特段影響を与えているわけではなさそうである。

韻書からの逸脱の内実について、前節と同様に見ていく。まずは、「一音節去声字の上声化」と見られる例である。

⑤…戊、汙の二字二例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、一一字一三例。

⑥…器、議、治、素、置、墓、未、霧、吏、汙の一〇字一二例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、一一字一五例。

⑦…為、衣、庫、志、侍、舎、庶、素、地、二、墓、夜、吏、慮、露、傅、卉、魏の一八字三〇例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、九字一〇例。

⑧…覇、翡、屣の三字三例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、八字八例。

⑨…寄、忌、去、御、素、夜、慮、路の八字八例。韻書通りの去声点が付されている一音節字は、一八字二〇例。

ここでもやはり、久遠寺本（⑤⑧）でさほど上声化が進んでいないのに対して、特に⑦に上声化例が多いという傾向が見て取れる。ただ、巻六の各本と比べて巻一三・一四各本の方が上声化が進んでいるということはなく、むしろ上声化の度合いは巻六に比べて低くさえある。仏教的な文脈であれば呉音の干渉が強く、その分一音節去声字の上声化も多く起こる、というような単純なものではないことが読み取れるのである。

それでは、韻書二音節去声字に上声点が付されている場合というのはどうだろうか。

⑤…愚（平）暗（上）、奠（上）（単独）、暗（上）魂（平）

⑥…代（去）々（上）、恒（去）例（上）、暗（平・上）[13]中（平）

⑦…考（上）妣（平）、鍾（平軽・上）愛（平・上）

⑧…煨（平）燼（上）、視（上）聴（上）

⑨…万（去）乗（上）、破（平）暗（上）、及（入）第（上）、時（上）代（上）

こちらに関しても、確かに「代々」「恒例」「視聴」のような「中低型回避」例とおぼしきものが出現するものの、それに当てはまらない例も存する。やはり、呉音の声調変化と完全に平行しているとは言えない状況にある。

最後に、「韻書上声非全濁字の去声加点例」についてである。

⑤…#考、#乃、妣。

⑥…#魯。

⑦…#遠、#管、#起、#朽、#許、#五、#孔、考（二例）、#首（二例）、掌、壌、#祖（三例）、#長、#匪、#不、#母、嶺、#魯、#棗。

⑧…#手。

⑨…#寡、算、#璽、貯、乳、矢、卵。

巻六でそうであったのと同様、ここでも語頭に去声点が付されている場合が多いことが読み取れる。ただ、用例数が少なく、断定しかねる憾みはあるものの、どの資料でも等しく語頭に去声が現れるわけではないことが注意される。すなわち、⑦などは明らかに語頭に去声点が付されたものが多く分布しているのに対し、⑨ではむしろ語中字に去声点が付された例の方が多いのである。

ところで、前節で巻六を調査したところによると、巻六では「語頭…去声、語中…上声」という傾向が出ていたのであり、巻一三・一四の調査結果とは食い違うようである。このことをどう考えるべきだろうか。

すでに述べてきたように、『本朝文粋』の字音声調には、様々な面において日本語化を被ったものが含まれており、しかもどの資料でどの種類の変化が多く起こっているかというような傾向性は見いだしがたかった。このような『本朝文粋』の性質を踏まえると、巻六で語頭去声が多く現れる反面、巻一三・一四でそのような傾向が見いだせなかったのも、今回調査した①～④がたまたまそのような資料だったからに過ぎないと考えられる。今後より多くの巻六古写本の調査を行ったならば、その中から「語頭…去声、語中…上声」の分布を示していない資料が現れるであろうと想像されるのである。

『本朝文粋』巻一三・一四に関しても、巻六で見られたような「一音節去声字の上声化」や、それに対する「直しすぎ」の例などが存した。ここでもやはり呉音声調の影響を受けたと思しき声調変化が観察されるが、しかし呉音語が多く現れる文体であることそれ自体が、ただちに漢音声調に呉音的要素を多く交える原因になるわけではないと考えられる。

四、（補）観智院本『世俗諺文』の場合

最後に、『本朝文粋』とは別の日本漢文資料についても見ておきたい。ここで着目するのは、前出『天理図書館善本叢書・平安詩文残篇』に収められている『世俗諺文』である。

『世俗諺文』については、かつて石山裕慈（二〇〇六）において考察したことがある。もっとも、ここでは字音声点の分布に関しては事実の指摘にとどまり、その内実に関しては手つかずのままであった。ここで改めて、前節までと同様の考察を加え、『世俗諺文』に加えられた字音声点の性質について、その一端を垣間見ようとするものである。

『世俗諺文』についても、前節までと同じ要領で対応表を作成

し、「別表」に⑩として掲げる。なおその後再調査を行ったことにより、石山（二〇〇六）とは数値が異なっている箇所がある。

まず、韻書去声字に上声点が加えられた場合を見てみる。全用例を出現順に列挙する。

独（入）歩（上）、七歩（上）、簷（平）事（上）府（上）、放（上）斉（平）、王（平）事（上）、哺（上）、梁（平）丘（平 軽）、拠（上）、御（上）者（上）、侍御（上）、菜（上）色、七歩（上）、豫（上）譲（上）（二例）、班（平）固（上）、怛（入）誦（上）、書（平）契（上）。

これらの例の中には「中低型回避」と見られる上声加点例がほとんどなく、むしろ「一音節去声字の上声化」が目につく結果になっている。また、「怛誦」「書契」については「語中上声」例と言えそうであるが、『本朝文粋』巻六ほどには現れていない。

その一方で、別表を見て気づくのは、「韻書上声非全濁字への去声加点例」が、『本朝文粋』に比べて際立って多いことである。『世俗諺文』における韻書上声非全濁字（原則通りだと上声点が加点されるはずの一群）に対して、上声点・去声点のいずれが加点されているか、音節数により分類すると、下のようになる。

この表によると、日本漢音の原則に反して去声点が加えられている例というのは、明らかに一音節字に偏っている。第二節で指摘したところによると、『本朝文粋』においては、「一音節去声字の上声化」や、それに対する「直しすぎ」と考えられる例が存した。『世俗諺文』とは、この「直しすぎ」の例がきわめて大量に現れる資料であるということが指摘できる。

それでは、語頭／語中の分布に関してはどうだろうか。今度は、韻書上声非全濁字に対して、上声点・去声点のいずれが加点されているか、当該字の位置により分類する。

	1音節	2音節
上声点	91	156
	21	68
去声点	157	10
	49	8

※上段が延べ字数、下段が異なり字数。次の表も同じ。

この場合も、日本漢音の原則に反して去声点が付されている例というのは、語頭に多く分布していることが分かる。これもまた、呉音声調のありように引きずられた「声調変化」であると言うことができる。

結局のところ、『世俗諺文』の漢音声調とは、呉音声調の影響を色濃く受けている…しかも当時の声調変化の大勢に逆らって、本来上声点を加点すべきところに去声点を加点するという「直しすぎ」が発生している資料であると言える。とはいえ、このような資料は、現時点では『世俗諺文』以外に管見に入っていない。この種の「直しすぎ」の現象がどの程度一般的であったのかなど、さらに古文献を調査したいと考えている。

	語頭	語中
上声点	118	132
	58	45
去声点	116	56
	44	24

五、まとめ

本稿では、『本朝文粋』各本を中心に、韻書上声非全濁字に対する去声加点例と韻書去声字に対する上声加点例について、「声調変化」の内実を探ることを試みた。その結果、まず中世に書写された『本朝文粋』古写本においては、従来指摘されてきた「一

音節去声字の上声化」が見られるとともに、逆にそれを意識したことによる「直しすぎ」、すなわち韻書上声非全濁字に対して去声点を加点するという例が観察された。また、語頭の韻書上声非全濁字に対して去声点が、語中の韻書去声字に対して上声点が加えられる傾向があり、これも当時の呉音声調のありように影響を受けたものであると考えられた。

その一方で、このような韻書から逸脱した上声／去声加点例の発生の度合いや、またそれぞれの声調変化の現れ方などは、本によってまちまちだった。それは本文中に呉音語が多く現れるか否かという事柄とも、基本的には無関係であると思われた。

『本朝文粋』のほか、『世俗諺文』についても考察を行った。こちらについては、先述の「直しすぎ」こそが多く見られることと、語頭の韻書上声非全濁字に対して去声点が加えられている例が多数存することにより、結果的に韻書上声非全濁字の去声加点例が多数出現していた。「声調変化」の内実は様々であり、場合分けが必要であることが分かる。

本稿では、日本漢文資料に調査を限定したため、それ以外の分野の資料ではどのような現象が観察されるかについては、考察が及ばなかった。特に『本朝文粋』巻一三・一四や『世俗諺文』と同様に、あるいはそれ以上に呉音色の強い文体と想定される「仏書訓読資料」での実態はどのようなものか、他日調査を行いたい。[14] 様々な資料を調査し、それぞれにおける「声調変化」の実態を明らかにして中世日本漢字音の実態に迫ることが今後の課題である。また、「日本漢文資料」と一つに括れるかについても、検討せねばならない。

もう一点、種々の「声調変化」の性質それ自体を解明することも、今後の課題として残されている。すなわち、「一音節去声字の上声化」が音変化に属するのに対し、「中低型回避」や「位置による上声・去声の分出」などは形態音韻論的変化に属する事柄である。次元の異なる変化がそれぞれの資料でどのように現れ、またどのように消化されていたのかなど、考えるべき事柄はまだまだ多い。

注

（1）『広韻』に掲載されていない字は割愛した。また、一字に複数の声点が加えられているものについてはいずれにも計上し、合点などは無視した。上段が延べ字数、下段が異なり字数を表す。

（2）醍醐寺蔵『法華経釈文』や『補忘記』などに、そのような趣旨の記述がある。

（3）奥村三雄（一九五七）、高松政雄（一九八二）第三章（二）など参照。

（4）佐々木（二〇〇九）第三部第六章なども参照。

（5）沼本克明（一九九七）第一部第三章第三節、佐々木（二〇〇九）第二部第一章参照。

（6）類例として、図書寮本・六地蔵寺本『文鏡秘府論』の上声全濁字の去声化の割合が異なっていることを、かつて指摘したことがあった。石山裕慈（二〇〇七）参照。

（7）このあたりの事情については、沼本克明（一九八六）など参照。

（8）『本朝文粋』の仮名音注の中には、規範的な漢音形と食い違うものが出現することがある。音節数を議論する場合にどちらの形を採用するかという問題があるが、ここでは仮名音注の方を優先し

た。また、「守」などのサ行ウ段の拗音については、「シウ」「シュウ」「シユ」などと表記が錯綜しており、音節数を決することができない。そのため、音節数を議論する際には、これらの例は対象から除外した。肥爪周二（二〇〇一）参照。

(9) 高松（一九八二）第三章（六）、沼本（一九九七）第二部第三章など参照。

(10) 呉音資料と事情が異なっていると考えられるもう一つの事柄として、上声に変化した字自体の問題がある。すなわち、親鸞自筆資料においては、語頭の字やi-韻尾を持つ字が上声化しにくいことが指摘されている。佐々木勇（一九八七a）参照。

(11) #は語頭、傍線は一つの漢字に上声点・去声点の双方が加点されていることを表す。次節で同様の操作を行う際もこれに準ずる。

(12) 佐々木勇（一九八七b）参照。

(13) 上声点に合点が付されている。

(14) 仏書訓読資料における漢音声調の実態は、すでに佐々木（二〇〇九）第二部第三章で研究が行われているところである。ここで掲げられている広韻と声点との対照表によると、『本朝文粋』や『世俗諺文』とはまた性質が違っているように感じられる。

［参考文献］

奥村三雄（一九五七）「呉音の声調体系」（『訓点語と訓点資料』八）

加藤大鶴（二〇〇九）「『尾張国郡司百姓等解文』における二字漢語の声点」（アクセント史資料研究会『論集』五）

———（二〇一〇）「『宝物集』の漢語声点」（アクセント史資料研究会『論集』六）

小林芳規（一九九〇・九一）「本朝文粋巻第六延慶元年書写本（乾）・（坤）」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』一〇・一一）

———（一九九二）「醍醐寺蔵本朝文粋巻第六延慶元年書写本の訓点について」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』一二）

佐々木勇（一九八七a）「呉音二音節去声字に対する上声点加点例について」（『国文学攷』一一三）

———（一九八七b）「呉音一音節去声字の上声化の過程」（『鎌倉時代語研究』一〇）

———（二〇〇九）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院）

高松政雄（一九八二）『日本漢字音の研究』（風間書房）

沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院）

———（一九八六）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）

———（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究』（汲古書院）

肥爪周二（二〇〇一）「ウ列開拗音の沿革」（『訓点語と訓点資料』一〇七）

石山裕慈（二〇〇六）「観智院本『世俗諺文』の漢字音（付・字音点分韻表）」（『日本語学論集』二）

———（二〇〇七）「六地蔵寺本『文鏡秘府論』の漢字音」（『日本語学論集』三）

———（二〇〇九）「醍醐寺本『本朝文粋』の漢字音」（『訓点語と訓点資料』一二二）

———（二〇一一）「『本朝文粋』における漢語声調について」（『訓点語と訓点資料』一二六）

（いしやまゆうじ／神戸大学）

別表

①

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	17	4	2	16		1	2	2
	14	4	2	13		1	2	2
去声点		1	8	1	27	6	21	22
		1	8	1	23	6	18	17

②

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	111	12	19	64	27	3	18	21
	51	8	10	33	20	3	12	9
去声点	5	1	22	2	78	9	46	46
	5	1	11	2	46	7	28	28

③

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	150	25	36	102	27	7	27	30
	55	14	12	42	20	6	12	10
去声点	9	2	72	4	140	15	77	76
	8	2	26	4	64	9	41	37

④

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	172	25	35	95	29	8	28	35
	52	13	13	35	24	5	12	13
去声点	8		74	4	149	15	77	76
	7		26	4	64	9	41	37

⑤

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	37	5	9	16	3		1	1
	29	5	9	14	2		1	1
去声点	1	1	7	1	26	4	27	14
	1	1	6	1	25	4	24	12

⑥

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	49 30	11 7	5 5	21 17	5 4	1 1	2 2	7 6
去声点			19 14	1 1	46 33	9 8	25 19	13 11

⑦

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	77 42	11 6	5 5	21 17	11 10	1 1	4 1	16 8
去声点	13 10	4 3	11 11	6 6	41 30	6 6	31 21	25 18

⑧

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	13 10	6 5	1 1	13 12	2 2	1 1	2 2	
去声点	1 1		10 9		26 24	9 7	18 16	11 11

⑨

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	29 19	11 4	4 3	11 8	3 3	1 1	4 4	4 4
去声点	5 5		9 9	2 2	30 22	15 12	37 32	29 25

⑩

韻書 / 本資料	上声				去声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
上声点	146 48	35 14	21 10	68 28	3 3	2 2	7 4	6 3
去声点	87 25	20 7	115 45	66 26	191 90	28 15	95 39	109 51